

プラスとマイナス

ホラー小説を書きつづけ、読者に恐怖の疑似体験をさせる作家、鈴木光司。いったい、どんな辛気臭い人間が現れるんだろうと想像する記者の前に現れたのは、「怖い」となどは、可笑しくて口にしようにもない男性だった。

凡人が想像する青白くやせ細った文豪……という印象はまったくない。クルーズで日焼けし、週2回のジム通いで鍛えられた体と、豪快な笑い声。エネルギーに満ちあふれているのが、話をしていただけで分かる。

ストレスなんか無さそうですね、と少々失敬な質問をした記者に、鈴木はガハハと笑いながら「作家やっていると、ストレスがたまると、どうにかしてるよ」とぼつさり。作家志望の若者へのアドバイスを求めると、「作家ほどおいしい商売はないから、がんばれよ」と冗談

を飛ばす。

「昔の作家は、そんなこと絶対言わないよね。(腕を組み低い声で) やめたまえ、苦悩の多い仕事だよ、って。何が苦悩だよ(笑)」

しかしここで真面目な顔に戻り、自分の執筆姿勢を語った。

「人はみんな、自分の中にいろんな体験が積み重なっているよね。それを簡単に、プラスとマイナスに分けるとしよう。」

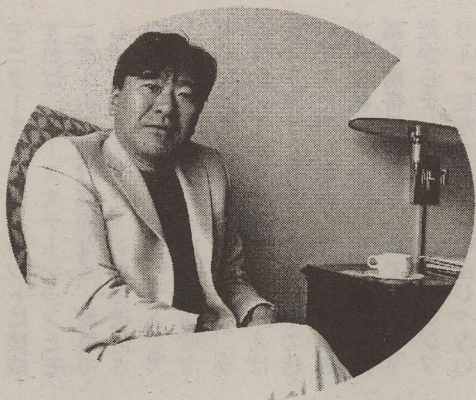
マイナスが多い人は、引き込むエネルギーで小説を書く。日本にはそういう作家が多かったかもしれないね。太宰治とかさ。そうなる、書くことはしんどいね。でも、本当は書くことじゃなくて、生きること自体がしんどいんだよ。

僕は運がよくてマイナスの経験があまりない。生きているのがしんどいなんて、感じたことがない。そのプラスがあふれ出すエネルギーで小説を書いているから、それを受け取った読者はそこからエネルギーを得るんだと思う。僕にとつて、小説を書くというのは、あふれるプラスを撒く作業なんだ」

ホラーは栄養素

だったら、また何でホラー小説を？ と誰でも疑問に思うだろう。実は、鈴木自身、ホラーにはあまり興味がないという。最近ハリウッドでリメイクされ大ヒットしているホラー映画「呪怨」についても、原作を読んだが、好きになれなかったという。

日本ホラー業界(?)の世界進出



に先鞭をつけた張本人が、いったい何を言い出すのか。

「リングだって、自分では面白い小説を書いたつもりだったのに、出来上がったらみんながホラーだ、ホラーだって……。まあ怖いんだから仕方ないんだけどね。」

「呪怨」がいやなのは、グロテスクだから。気持ち悪いものを羅列したって、人を嫌な気持ちにするだけでしょ。本当に背筋が凍るような怖さは、もつと別のところからくると思う。

人間って、いろんな感情を味わったほうがいい。笑うのも大事、感動して泣くことも大事、そして怖がることも大事。想像力に頼る怖さって、脳の栄養になると思うんだよ。

だから、その怖いという感情を刺激する役目を、小説家として担えというなら、もちろんそれは可能だよ。でも、おれが書きたいのは人にエネルギーを与える小説。

リングだって、『らせん』『ループ』と三部作を全部読んだら、若い世代に生きる勇気を与える小説になっているのが分かると思うよ」

スリル満点

かく言うご本人も、最初から「3部作にして、感動の結末を迎えよう」などと予定していたわけでは決していない。

「リングを書いている頃なんか、この先、小説家としてやっていけるかどうか……という感じだった。書き終わって、編集者に続編を書きませんかと言われて、悩みながら書いたんだよ。」

3部作完結までに9年間もかかっているんだからさ。そんな先のことなんか分かってこないしね」

小説「リング」を読まずとも、テレビ、映画で同作を見た人は多いはず。おなじみの「貞子」が(文字通り)出てくるビデオテープが恐怖の根源となるストーリー。身近で近代的な道具が恐怖を駆り立てるところが、既存の「恐怖小説」と違うところだろう。

「リングを書いているときにさ、ふと見たところにビデオテープが

あったんだよ。それで、はいはい、ビデオテープねって(笑)。偶然的の産物ですよ。

小説って人の一生と同じで、自分で勝手に終わりを決められない。人生が偶然に左右されるように、小説も書いている環境に影響を受ける。雷が鳴れば、雷のシーンを書くかもしれないし、そのちよつとした違いが、最後はまったく違う作品を生み出す可能性だってある。小説を書いているときって、自分も読者なのね。次はどうなるんだろう、先が知りたいって思いながら書いている。

ヘッドライトで少しずつ先を照らしながら進んでいくようなもの。そこに道があるのかどうかさえ分らない。でも、ちよつとだけ先は見えてるから、とりあえずそこまで行ってみる。で、着いたらまた少し先が見えるからまた進む。

最後まで行ったら崖っぷちかもしれないし。スリルとの戦いだね。最後までたどり着いたら、ヤッター！ って感じ。だから小説を書くのって、すごくエキサイティングな作業なわけ」



Dark Water
96年出版の短編集「仄暗い水の底から」の英訳版。パーティカル社出版。大型書店などで販売中 \$29.95

第25回国際作家フェスティバル

フロント来訪の作家

鈴木光司さん

〈取材・平山紀久子〉

光司(すずき・こうじ)

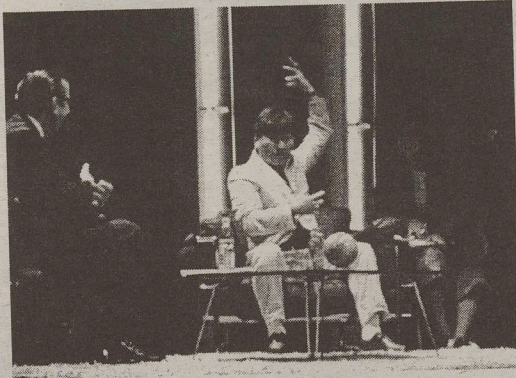
静岡県生まれ。83年、慶應義塾大学文学部卒業後、執筆活動に専念。90年、「楽園」で日本ファンタジーノ賞優秀賞、作家デビューを果たす。翌91年、「リング」出版。同作は95年にテレビドラマ化され、社会現象的なブームになる。95年、リング続編「らせん」、98年には3部作完結編となった「ループ」を出版。98年「リング」ら映画化され、大ヒットする。小説のほか、育児への父親参加に関する著書も多数。東京在住。

意欲の差

書くことが楽しくて仕方がないという様子の鈴木氏。作家になろうと決めたのは少年時代、それなら当然とばかりに大学は文学部に進む。周りが就職活動に励む時期になっても、「滑り止め」に会社勤め：などと浮気もしなかったそう。

「作家志望の人間が、実際にそれを実現するかどうか。それは意欲の差としか言いようがないね。そして、その意欲というものは、自分では生み出せないもの。周りから与えられるものだと思う。」

僕がなぜ、意欲を継続できたのか、はつきりとは分からない。理屈では分析しきれないと思う。ただね、僕の奥さんは、僕が作家になるということを疑ったことはなかったね。それから、大学卒業しても就職しないなんて、普通の両親は嘆くんだろうけどさ、うちの両親はサポート体制がっちり。26歳で結婚したんだけど、妻の両親



▲作家フェスティバルの公開インタビューで、「リング」執筆時の様子を語る鈴木光司。「ひざに娘一人、背中にもう一人…」＝10月24日ハーバードフロントセンターで

宮沢賢治

そのがっちりサポートの奥様との出会いは、なんと小学校5年生のころ。つまり、初恋の相手と結婚したということだ。実はこの出会いと時を同じくして、鈴木は作家を目指す原体験をしている。

「奥さんからはさ、あんたみたいに凶々しい人いないわよって言われるんだけどさ、自分では俺ってすごい繊細な子どもだったと思うんだよね。」

小学生のころ、いじめられている人を見ると、すごく悲しくなった。当時、イジメっていう醜い女の子が対象になるって相場は決まっているわけ。バイキンとか、あつちに行けとかさ、みんなが言うわけよ。で、言われた人はすごく悲しそうな顔をするの。それを見たら、僕もすごく悲しくなったんだよね。

海がオレを呼ぶ

繊細だった鈴木少年は、文学をこころざしつづけ、知らない人はいないというほどの作品を世界中に送り出している。

有名であることを、いかにも楽しんでる風の鈴木だが、その生活の元は、今でも家庭に根付いている。

「奥さんは1996年で学校を辞めて、今はのんびりしてるみたいです。娘は今、18歳と14歳。この二人がね、オレが8時まで家に帰らないと怒るんだよ。だから、毎日午後は仕事場で書くんだけど、大体7時45分には終わらせて、家に帰るんだ」

だが、今回のトロント来訪のように仕事で外国に出かけることも多く、また週末は地方での講演会などに引っぱりだかどという。

そして、毎年夏がくると、男鈴木光司を海が呼ぶのだ。

「小学校卒業のときの『将来の

でも、いじめている人達は、当然悲しくならないわけでしょう？ 自分が悲しくなるようなことするわけないんだから。この人達は何も感じないのかって、そういう疑問をすごく感じたね」

子ども心に、イジメについて考え、人間の何たるかを見たと感じた鈴木少年は、そのうち自分が共感できるものを求めるようになった。

「自分ができないイジメという行為をみんながやっている。つまり、周りの人とオレとで、心の動きが違うという認識はあった。そこで、オレは性格がいいんだとは思えない。オレだけみんなと違うというのは、とても怖いことだったのね。そんなとき、宮沢賢治に出会った。伝記を読んで、この人とオレは心の動きが同じだと思ったわけ。それから宮沢賢治にのめりこんで、彼が詩とか童話を書いていたらオレも書き始めた。」

だから最初の文学体験は宮沢賢治だ。そして彼と共感できたのは、そこにイジメというものがあつたから。もし、時代を超えて宮沢賢治とクラスメートだったら、きつといい友達になれたと思う」

夢』が太平洋横断で、その夢を今でも持ちつづけている。

リングを書いたころに、とりあえず4級の船舶免許を取ったの。今は金はないけど時間がある、そのうちそれが逆転するだろうと思ってる。そのとき、5年先ぐらいにはクルーザーが買えるんじゃないかなって、なぜか思ってた。

そのちようど5年後に、最初のクルーザーを買って、それを仕事場にして書いた『ループ』がミリオンセラー。それでお船も買い換えで、免許も1級にステップアップ

今は太平洋横断用のヨットを買ってあるし、時間と人間とがそろえば来年にも実現しそうだなきない。そうしておかないとタンだよ」

現在、消えた船の実話を素材にした「エッジシティ」の執筆中という作家、鈴木光司。新作発表会ニユースと、「ホラーの大家、ヨトで太平洋横断」のニユースのちらが先に伝わってくるだろうか

11/5/2004 Koji Suzuki

